

W.S. クラーク博士と伊藤圭介

一日米文化交流史の一断面―



0. はじめに

尾張生まれの伊藤圭介は、長崎オランダ商館長付医師として来日したシーボルト Siebold に師事し、リンネの植物分類を日本で初めて紹介したことや、日本で最初の理学博士となったことで広く知られている。一方、札幌農学校教頭 W.S. クラーク博士は、近代科学の日本への移入に与った御雇外国人の一人として、また、Boys be ambitious! という言葉を残したことで周知である。W.S. クラークと圭介は、それぞれ著名であり、また、それぞれについての研究も数多い。

しかしながらこれまでの先行研究では、クラーク、圭介両者の関わりは、「クラークは13日頃小石川植物園（文部省）……等を参観せられた」（逢坂 1995（1956）：147-148）、「7月13日（木）。小石川植物園を見に行った」、「7月14日（金）。……この日の晩は日本人の植物学者〔伊藤圭介、1803-1901と思われる〕とその助手がクラークの招きでホテルにやって来て、クラーク達と食事を共にした」（太田 1979：69）と敷衍されてきたのみであり、両者の交流が主題として取り上げられ、詳細に論じられたことは管見の限りない。

このような中、2005年11月に上梓された『伊藤圭介日記』第11集（1876（明治9）年1-7月）の7月13、14両日、および24日には、伊藤圭介とW.S. クラークおよび彼と共に来日したホイーラー、ペンハローとの交流が記されている。そこで、本稿で

は、『伊藤圭介日記』第11集からW.S. クラークと伊藤圭介との交流に関わる記述を辿り、両者の交流の意味について検討を加えたい。

1. W.S. クラーク William Smith Clark (1826-1886)

(1) W.S. クラークに関する研究史

日本は、幕末以降、欧米の近代文化を急速に移入する方策として、主として欧米の先進諸国から外国人を招聘、雇用した（梅溪 1968：8-9）。この御雇外国人の諸活動・業績を通じて、日本の近代化



W.S. クラーク(1877年)
(北海道大学北方資料室北方資料データベースからダウンロード)

に及ぼした諸外国の影響や日本の近代化の特質を理解しようと、これまでに多くの研究がなされてきた。御雇外国人は多数にのぼり、また多分野に渡る。それゆえ、それに関する研究もまた多岐に渡っているが、『お雇い外国人』全17巻（1968-76）は、それらを概観することができる。W.S. クラークについても、同シリーズ、原田『お雇い外国人13：開拓』（1975）に点描されている。

クラークの生涯に関しては、逢坂『クラーク先生詳伝』（1995（1956））が、必ずしも出典が明示されておらず、また、偉人として祀り上げられている感が否めない

*中部大学国際関係学部国際文化学科

が、多くの資料に基づく詳細な伝記であり、クラーク研究の基本文献と言えるだろう。マキ『W.S. クラーク』（1986（1978））は、豊富な資料に基づき、クラークの生涯を丹念に描き、人間的なクラーク像を提示する。

太田『クラークの一年』（1979）は、クラークや彼に同行して来日したホイーラーの家族宛の手紙に基づいて、彼の日本における足跡を詳細に辿った。佐藤ほか編・訳『クラークの手紙』（1986）は、クラークと札幌農学校生徒との往復書簡から、帰国後における生徒との交流を知ることができる。蝦名『札幌農学校』（1991）は、クラークの教育理念・実践について詳しい。藤田『北海道を開拓したアメリカ人』（1993）は、1次資料に基づいて北海道開拓に関わったクラークらアメリカ人の足跡をたどり、日本での異文化体験を示す。

一方、渡辺『増訂お雇い米国人科学教師』（1996（1976））は、アメリカの広範な史料に基づいてアメリカの御雇外国人を科学の受容という科学史的観点から論考した。クラークについても、同書の中で、その生涯と活動を再検討し、植物学と農学への寄与について考察して、クラークを科学史上に位置づけた。

クラークの1次資料については、クラーク自身が札幌農学校の現状や教育・研究の結果をまとめて年報とした開拓使『札幌農学教頭米人クラーク氏原撰 札幌農学年報』（1976（1878））が、当時どのような構想の下に札幌農学校が組織・運営されたのかを示しており、有益である。クラークの主要学術論文は、山本編著『W.S. クラーク博

士論文集』（1993）に所収されている。また、クラークの書簡については、北海道大学附属図書館北方資料室北方資料データベースによって検索することができる。

（2）W.S. クラークの略歴

以下では、W.S. クラークの略歴を確認しておきたい（渡辺 1996（1976）：301-304）。

W.S. クラークは、1826年7月31日、マサチューセッツ州に生まれた。同州のウィリントン・セミナリー Williston Seminary を卒業、続いて1848年アマースト大学 Amherst College を卒業し、1850年まで母校ウィリントン・セミナリーで自然科学を教えた。クラークの専門は鉱物学であったが、ゲッティンゲン大学留学を契機に、彼の関心は鉱物学から植物学へと転換していった。クラークは、ロンドンのキュー植物園 Kew Gardens を訪れ、「ヴィクトリア・レギア Victoria regia [水蓮] —— 温帯において最大の葉と花をもつ植物 ——」を目撃し、「いつの日にか必ず合衆国に植物園を作り、このすばらしい水蓮を咲かせてみようという決意」を固めた。クラークと農科大学の結びつきは、その時に「植物学上の目的を達成しようと決意したことに直接由来している」とクラーク自身が言う。

1852年留学から戻ったクラークは、アマースト大学教授に迎えられ、化学、植物学、動物学（1858年からは化学のみ）を教えた。1859年からの2年間は、マサチューセッツ州の農業委員も兼務した。南北戦争（1861-65）時には、自ら志願して

兵役に服した。アマースト大学に戻って再び化学を教授し、同時にマサチューセッツ州議員として、州立農科大学をアマーストに誘致することに尽力した。その努力が実り、アマーストにマサチューセッツ農科大学 Massachusetts Agricultural College が設立されると、1867 年その第 3 代学長に就任した。この年から新入生を受け入れたので、事実上は初代学長であった。彼は自ら、植物学、園芸学を担当した。

一方、日本では、北海道開拓次官（後に長官）黒田清隆の提唱と開拓使顧問ケプロン Capron の献策によって 1872（明治 5）年に東京、芝増上寺に北海道開拓の指導者を育成するための開拓使仮学校が開設された。後に、札幌に開設すべき新しい農学教育機関の指導に当たる外国人教師の雇用が検討され、マサチューセッツ農科大学学長のクラークがその任に当たることとなった。彼は、1876 年 3 月 3 日署名調印した。契約期間は 1876 年 5 月 20 日から 1 年間であり、この間の学長の任務は農学教授のストックブリッジ Stockbridge が代行することとなった。1876 年 7 月 31 日に札幌に着き、札幌農学校教頭として力を発揮し、翌年 5 月に日本を去った。なお、クラークの日本行きに同行したのは、ウィリアム・ホイラー William Wheeler（1851-1932、土木工学・数学等を担当）と D.P. ペンハロー David Pearce Penhallow（1854-1910、植物学・化学・農学および英語を担当）の二人である。

クラークは、帰国後マサチューセッツ農科大学に戻ったが、洋上大学の計画に専念

するため、1879 年に大学を辞した（同洋上大学計画は、最終的に、提唱・出資者の急死により実現不可能となった）。

2. 伊藤圭介（1803-1901）

（1）伊藤圭介に関する研究史

圭介についてもまた、多くの先行研究が存在する。圭介は、シーボルトに師事し、リンネの植物分類を日本で初めて紹介したことや、日本で最初の理学博士となったこともあり、生前から伝記が著された。また、長寿を全うした圭介は、80、88、90、96 を祝う会が催され、その折々に顕彰のための会誌が編まれた。

圭介の生涯は、吉川（木村・遠藤編）『医学・洋学・本草学者の研究：吉川芳秋著作集』（1993）所収の吉



伊藤圭介（1876 年）
（名古屋市東山植物園所蔵）

川芳秋の諸論文により、概観することができる。圭介の一族である杉本による『伊藤圭介』（1960）は、詳細な伝記である。これらは、圭介研究の基本資料として位置づけることができるだろう。一方、圭介文書研究会が、1981（昭和 56）年 4 月発会以来、名古屋市東山植物園伊藤圭介記念室所蔵の伊藤圭介の日記類の解説・編纂作業にあたり、『伊藤圭介日記』の刊行を続けてきている。これもまた、圭介の日々の生活や関心などを窺い知ることができる貴重な資料

である。

2001（平成 13）年、2003（平成 15）年と、圭介の没後 100 年、生誕 200 年を機に、圭介研究は勢いづいている。中でも、土井の近著『日本初の理学博士 伊藤圭介の研究』（2005）の研究成果を挙げる必要があるだろう。土井は、『伊藤圭介日記』や書簡をはじめとする新史料を詳細に検討し、尾張藩医時代の洋学者としての活動を明らかにするとともに、明治政府勤務期の活動を総括して日本初の理学博士を授与されるにいたる経緯を明らかにした。

（2）伊藤圭介の略歴

伊藤圭介は、1803（享和 3）年町医師の子として尾張に生まれた。水谷豊文について本草学を学び、長崎にてオランダ商館長付医師として来日したシーボルトに師事した。圭介は、シーボルトから授けられたツユンベリー著『日本植物誌』を翻訳し、1829（文政 12）年『泰西本草名疏』を刊行した。同書は、リンネの二名式命名法を含む近代的分類体系をわが国に初めて紹介した書として画期的な意味を持つものである。創案された植物学用語のうち、雄蕊、雌蕊、花粉などは今日も使用されている。このほか圭介は、尾張で初めて種痘を実施するなど、医師としても活躍した。なお、圭介とシーボルトとの交流については、財部（2005）を参照してほしい。

その後、圭介は 1861（文久元）年に幕府から蕃書調所出仕を命じられ江戸に赴いたが、1863（文久 3）年尾張に戻る。明治になり新政府から出仕を命じられた圭介は、

尾張の地を離れ東京に転居する。1870（明治 3）年 12 月、68 歳の時に大学（大学南校物産局）に出仕する。その後、新政府樹立時のいまだ定まらぬ文教政策の中で圭介は次々と異なるかたちの出仕を仰せ付けられる。その後 1875（明治 8）年 6 月、（東京博物館所属）小石川植物園へ時々出仕するよう命じられ、1877（明治 10）年に東京大学が設立され、小石川植物園が大学付属となると、圭介は東京大学理学部〔定〕員外教授（後に教授）となり、そのまま継続して植物園にて植物研究に従事した。その後圭介は、1886（明治 19）年 3 月、東京大学が帝国大学になった時、非職となり、1888（明治 21）年、わが国最初の理学博士の一人に列せられた。圭介は、1901（明治 34）年 99 歳で没した。圭介の小石川植物園での活動については、財部（2003）を参照してほしい。

3. W.S. クラークと圭介の交流

——『伊藤圭介日記』第 11 集から

本章では、『伊藤圭介日記』第 11 集に見られる伊藤圭介と W.S. クラークとの関わり（7 月 13、14、24 日）を順に辿っていく。

前述したとおり、クラークは、札幌に開設される新しい農学教育機関、札幌農学校の指導に当たるため、来日した。契約期間は 1876（明治 9）年 5 月 20 日からの 1 年間である。クラークは、6 月 29 日に着京し、7 月 25 日に札幌に出立するまでの約 1 ヶ月の間、築地采女町精養軒に宿泊し、芝増上寺方丈跡の開拓使東京出張所に通いつ

つ、札幌行きの準備を進めた。この間、札幌農学校入学志願者に対する試験をはじめとして、多くのことをこなしている。その後クラークは、札幌において、札幌農学校教頭として力を発揮し、翌年5月に日本を去ることとなるのであるが、圭介との出会いは、着京し札幌へ向かうまでの約1ヵ月の間のことであった。なお、日本滞在中のクラークの足跡については、稿末の資料1、2を参照してほしい。

一方、圭介は、1870（明治3）年12月、大学（大学南校物産局）に出仕し、1875（明治8）年6月には（東京博物館所属）小石川植物園へ時々出仕するよう命じられ、実質的に植物園の管理を任されることとなった。圭介がクラークと出会ったのは、この頃である。なお、東京大学が設立され、小石川植物園が大学付属となるのは、翌1877（明治10）年のことである。

（1）7月13日（土）

七月十三日 出園

一、昨日植物園へ開拓使より沙汰有之由、今日米人三人参旨ニ而十一時頃来園

William S. Clark ケラー

President Sapporo Ag. college
Hokkaido, Japan.

外式人、其一、Penhallow

其一、William Wheeler

皆弱キ人

[頭注] 三雲、蜷川へ行、米ノ用モヤハリ北海道当人へ可頼遣約、一、カウヤマキ実、一、種モノ交易、一、押葉交易

（『伊藤圭介日記』第11集：141）

1876（明治9）年7月13日にクラークらが小石川植物園を訪問したことは、先行研究により明らかであった。今般、上述の日記により、前日7月12日に開拓使から訪問の連絡があったこと、また、クラーク、ペンハロー、ホイーラーの実際の訪問が7月13日11時頃であったことなど、訪問の詳細が新たに明らかとなった。事前連絡を受けていたことから、圭介は、何らかの心積もりをして、外国からの来客を迎えたと考えられる。

圭介がクラークの肩書きを「President」と記していることに関して若干敷衍したい。日本側はクラークを「教頭」、「副校長」として扱ったが、クラークは威厳にかかわるとして、札幌農学校では「President」[学長]という職名を使っていた。日本に赴任する際、Assistant Director とする契約書には President の文字が書き加えられたとされる（マキ 1986（1978）：159-160）。

「皆弱キ人」という意味は、クラークらアメリカ人の年齢が若いということであろう。その時、圭介は齢74歳。ペンハロー22歳、ホイーラー25歳。クラークは、札幌到着の7月30日に50歳の誕生日を迎えたが、「私を40歳以上だと思ふ人はいないし、35歳にもなっていないと思ふ人が多い」と自負し、ホイーラーもクラークが「年のわりには非常に行動的で、見た目も若々しい」ことを認めていた（藤田 1993：149）。圭介が、アメリカ人一行は皆若いとの印象を持ったのも頷ける。

「米ノ用モヤハリ北海道当人へ可頼遣約」

という記述から、アメリカ人の用は、圭介が想定していたとおり、当人へ頼み遣わすべく取り決めであった。「カウヤマキ」は、コウヤマキ高野槇（学名：Sciadopitys verticillata (Thunb.) Sieb. et Zucc.）のことであり、高野山に多く産することからこの名がついたとされる。日本特産のスギ科の常緑高木で、本曾地方より西に自生し、高さ約 40 メートルに達する。姿が美しく、公園樹、庭園樹、庭木、社寺林として利用される。暑さに強く、耐寒性もあり、北海道の東、北部地域以外での越冬が可能とされる。クラークは、その耐寒性を考慮して、コウヤマキの種子を求めたのであろうか。

また、日米間の「種モノ交易」、「押葉交易」についても話題に上ったと推察される。クラークは、日本の植物に関心をもち、日米間で植物を交換することの実際的な有用性を強く意識していた。実際に、日米間、とりわけ札幌とマサチューセッツ州の間で植物の種子や苗木の交換を行ない、その結果、クラークによってはじめてアメリカに移入された日本産の植物も少なくない（渡辺 1996 (1976) : 318)。

(2) 7月14日

七月十四日

○今日五時カ

築地西洋軒へ行候筈

一、山田同道、昨日参候米人、米人 Clark
ヲ訪、築地精養軒馳走有之、且同人著
書恵ム

〔頭注〕初メ十四五六ハ宿、米人来候旨、
押葉一見

（『伊藤圭介日記』第 11 集：142）

クラークは、小石川植物園訪問の翌日 14 日の夕方 5 時に、圭介と山田を自身の宿舎である築地精養軒に招いた。「米人来候旨」とあり、当初はクラークの方が圭介のもとに赴くことにしていたのかもしれない。精養軒でどのような会話がなされたのか窺い知ることはできないが、「押葉一見」という記述から圭介がクラークの押葉を鑑定したことは想像に難くない。クラークは、前日 13 日の面談で、圭介の日本の植物に関する知識を高く評価したものと考えられる。

築地の精養軒ホテルは、三条実美、岩倉具視らの援助を受け、1873（明治 6）年開業した。同ホテルは、客室、食堂、宴会場などを備え、「立派に作られ、家具その他万事西洋式になっている二階建のホテル」（太田 1979：43）であり、「居留地の近く」「当時日本の中の文明開化の波がいちばん激しく押しよせていたあたりに」（太田 1979：272）建っていた。フランス人の料理長、コックが雇われ、正式な西洋料理を提供することで知られていたが、その料理は非常に高価だったため一般客には敬遠されたとされる。同所で、圭介には西洋料理がふるまわれたわけだが、圭介にとって西洋式ホテルでのひと時はさぞかし珍しい体験だっただろう。なお、今日上野公園内の上野精養軒は 1876（明治 9）年に開業した支店である。築地本店は 1923（大正 12）年の関東大震災により焼失した。

圭介に恵贈されたクラークの著書とはい

かなるものを指すのか不明である。

「山田同道」の山田は、現在のところ未詳である。『伊藤圭介日記』第11集の5月15日(103)に「今日園ニ而山田□□(虫食い破損のため判読不能)初而会面」と山田との出会いが記されている。その後、随所で山田の名前が見られる。おそらく、小石川植物園の職員と考えられる。

(3) 7月24日

七月廿四日 出園

一、植物園方山田連名ニ而精養軒へ逗留之
米人「ケラーク」江ハシカン一盆、マ
ツモト一盆為持遣ス」廿五日クラマ来、
昨夕参リクラーク方ニ而ハシカン見来
候旨

(『伊藤圭介日記』第11集:147)

7月24日に圭介は、植物園から前述の山田と連名で、クラークにハシカンボク(*Bredia hirsuta*、ノボタン科の和産の常緑亜低木)とマツモトセンノウ(*Lychnis sieboldii*、ナデシコ科の和産の多年草、耐寒性)を贈っている。クラークは7月25日に北海道へ旅立ったが、その前日24日には開拓使長官黒田が築地精養軒にてクラークらの送別会を開いている。圭介は、餞として耐寒性のある花を贈ったと考えられる。

クラマーは御雇外国人C. Kramer(1844?)のことであり、群馬県富岡の官営製糸工場の御雇、私塾の農学教師、大蔵省の御雇を歴任し、明治9年1月から7月まで東京医学校で製薬学と植物学の教授を

務めていた(その後9月以降は2年間植物学士として鹿児島県雇となる)。クラマーと圭介の間には、日本の植物研究をめぐり、交流がみられた。クラマーは、クラークの送別会に出席した折に、圭介が贈った花盆を見る機会があったと推察される。

4. W.S. クラークが実見した植物園

前章では、クラークの小石川植物園訪問および伊藤圭介との交流を辿ってきたが、クラークが実見したのは同植物園だけではない。クラークは、在京の間、いくつかの広義の植物園——植物を植えた一区画の土地——を実見している(資料1参照)。太田(1979:68)が指摘するように、「日本において自分の専門である植物学関係の知識見聞を積極的に広めようとするクラークの姿勢」が見て取れる。以下に、クラークが実見した植物園を整理したい。

(1) (開拓使直轄) 東京官園

開拓使は1871(明治4)年、東京に第一〜第三官園を開設した。その目的は、外国から輸入した動植物が北海道の風土に合うかどうかをまず東京で試すためである。第一官園は青山南町(旧伊予西条藩主上屋敷跡)、第二官園は青山北町(旧淀藩主下屋敷跡)、第三官園は麻布新筈町(旧下総佐倉藩主下屋敷跡)にあった(大蔵省1885:31)。

このうち第三官園は、熱帯植物のための温室までそなえた園芸試験場と、畜舎・納屋を付属した大規模な試験農場とからなっ

ていた。1873（明治6）年7月に来日したエドウィン・ダンは、同官園に配属され、1876年5月の札幌転任までの間、農場の経営にあたるとともに、開拓使に対して農業・牧畜に関して指導・勧告した（原田1975：191-194）。

このようなダンの尽力もあってか、クラークは官園についておおむね首尾よく運営されていると考えていた——開拓使顧問ケプロンの方策に対しては、若干の異論を持っていたのだが。クラークのマサチューセッツ農科大学ストックブリッジ教授宛の手紙（1876.7.10）には、官園について次のように記されている。

東京にある開拓使の模範実験農場はおよそ220エーカーのすばらしい土地を持っています。そして、いろいろな点で立派に運営されています。輸入された牛は優秀なショートホーン種およびデボン種の牛です。……残念なことにケプロン將軍〔1871年から1875年まで開拓使顧問〕はエアシア種の乳牛を買い入れませんでした（太田1979：55）。

開拓使の農場で私達はしろつめくさ、あかつめくさ、イタリアライ麦、チモシー、かもがや等の牧草が植えられたすばらしい畑を見ました。ここから種が注意深くたくわえられるでしょう。さまざまな種類の作物の栽培はほとんど完全と言ってよいほど立派です。雑草一本でも見逃されて子孫を残すということはないのです。小麦、からす麦、大麦はすじまきにされ、くわで手入れ

をされます（太田1979：56）。

（2）（内務省）内藤新宿勸業寮出張所

1872（明治5）年、政府は内藤家から上納された土地と買収した隣接地を合わせた58.7haの敷地に、最初の官営農業試験場「内藤新宿試験場」を設置した。1874（明治7）年には内務省勸業寮内藤新宿出張所となる。ここでは、穀物や果樹の栽培、養蚕、製糸、染料、畜産などの技術改良を行なったが、とりわけ穀物・果樹栽培に力が入られ、国内外の品種を収集・試植した（勝田2002：165-166、近藤1975：234, 240）。1877（明治10）年、勸農局試験場と改称する。新政府の農業振興政策拡充のなかで、同試験場は、その幅広い役割の一部を他に移し、1879（明治12）年、宮内省所管の新宿植物御苑となり、現在の新宿御苑へと繋っていく。

なお、併設された教育施設・農事修学所は、1877（明治10）年駒場に移転し、駒場農学校（後の東京大学農学部）となる。

ホイーラーは母宛の手紙（1876.7.19）の中で、同所を「内務省か農務省かの所有する全部で140エーカーほどの立派な農場と庭園」（太田1979：68）と表している。

（3）（文部省所轄教育博物館附属）小石川植物園

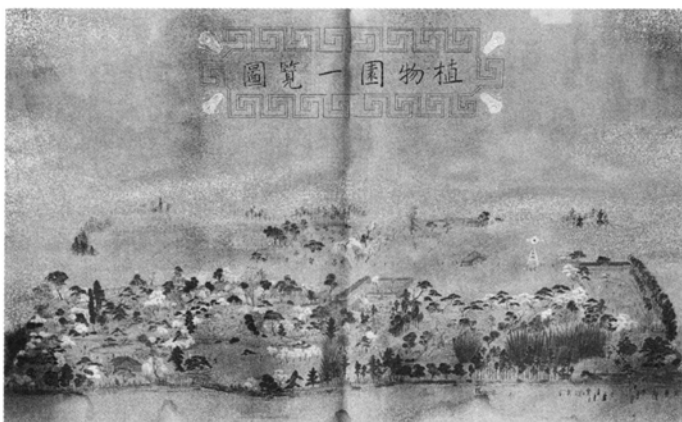
小石川植物園の歴史は、1684（貞享元）年に、徳川幕府が作った小石川御薬園にまで溯る。小石川御薬園は、幕末の混乱期にも存続し、製薬のための栽培園、製薬場として機能した。明治以降、小石川植物園の

所管および名称は目まぐるしく変わっていく。幕府瓦解後、小石川御薬園は、1868（明治元）年6月東京府の管轄に移り、大病院附属御薬園となった。その結果、混乱による壊滅的な破壊からまぬがれることができ、植栽されていた樹木などが残ったのである。1869（明治2）年にはこれが大学東校の管轄となり、医学校薬園、1871（明治4）年7月には大学東校薬園と呼ばれた。1873（明治6）年3月には太政官博覧会事務局へ併合された。このような変遷を経て、1875（明治8）年2月に文部省所管教育博物館附属となって、ここに小石川植物園と呼ばれることになった。1877（明治10）年、東京大学の創立とともに、植物園は大学附属となったのである。小石川植物園は、その所属を巡って、二つの見方があった。一つは、小石川植物園は元来が薬草園であり医学部の所属とすべきというもの、もう一つは、植物学の研究を目的とする理学部の所属とすべきというものである。最終的

には、理学部がもっぱら主管することとなり、今日、通称小石川植物園は、東京大学大学院理学系研究科附属植物園となっている（大場編 1996：30-41）。

小石川植物園は、台地、傾斜地、低地、泉水地などの地形の変化に富み、それを利用して様々な植物が配置されていた。同植物園は、開拓使直轄の官園や内務省内藤新宿勧業寮出張所のような実験場と呼ばれる類のものではなかった。薬園の面影は薄く、より開放的な植物園としての機能が強かった（邑田 2004：619）。1876（明治9）年同植物園の画工加藤竹斎により描かれた「植物園一覽図」は、その趣をよく伝えている。

ホイーラーもまた、母宛の手紙（1876.7.19）の中で、同植物園を「日本式の薬草およびそれ以外の植物のある広大な庭園」（太田 1979：69）と表している。伊藤圭介は晩年（73-84歳）、この「小石川植物園」で植物研究に携わったのである。



植物園一覽図（加藤竹斎画、1876年）
（東京大学大学院理学系研究科附属植物園所蔵）

5. まとめ

クラークは、在京の間、数箇所の植物園を実見した。そのような中、クラークは、小石川植物園で出会った伊藤圭介をどのように捉えたのか。一方、圭介はクラークをどのように捉えたのか。以下では、クラークと圭介の交流が、両者にとっていかなる意味をもったのかを考えてみたい。

(1) クラークにとっての伊藤圭介

①日本の植物への関心

江戸時代にはケンペル、ツウンベリー、シーボルトにはじまり、幕末のロシアのマキシモヴィッチ、フランスのサヴァチェ、アメリカ合衆国ペリー艦隊などまで、日本の植物を採集し、欧米で研究が行なわれた。当時の西洋の植物学者は、日本の植物に大変な関心を持っていたのである。

ペリーの遠征記録はアメリカ合衆国政府によって『ペリー日本遠征記』として1856年に出版されたが、後述するエイサ・グレイ Asa Gray はその報告書中に、彼らが「日本で採集した植物標本のリスト」を作成し、多数の新植物を記載した。グレイは、日本の植物相とアメリカ東部の植物相の類似性にふれ、「アメリカ合衆国の植物学者にとって、自国を除けば、植物について日本ほど興味をそそられる場所はほかにはない」と言う（グレイ 1997 : 303-305）。

クラークもまた、例外ではない。前述したとおり、日本の植物に関心を持ったクラークは、日米間で植物を交換することの実際的な有用性を強く意識していた。実際

に、クラークによってはじめてアメリカに移入された日本産の植物も少なくなかったのである（渡辺 1996 (1976) : 318）。

当時すでに約 200 年の歴史を持つ小石川植物園の樹木・草花は、クラークを十分に惹きつけたであろう。さらにクラークは、その植物園の実質的な管理をまかされていた圭介にも関心を持ち、圭介に日本の植物に関する知識を期待したことであろう。クラークが小石川植物園訪問の翌日、圭介を自分の宿舎まで招き、押葉の同定を依頼したのは、その証左と言えるだろう。

クラーク来日の翌年、1877（明治 10）年に来日した E.S. モース E.S. Morse は、文部省学監 デヴィッド・マレー David Murray の紹介で伊藤圭介に会う。モースは『日本その日その日』の中で、「彼は秀でたる植物学者で、1824 年既に日本のある植物協会〔嘗百社〕の会長であった。……ドクタア・グレー [Gray] やドクタア・グッドエール [Goodale] が、この日本の植物に就いては一から十まで知っている、優しい物静かな老人に逢ったら、どれ程よろこぶことだろうと考えた」（モース 1970 : 121-122）と圭介に言及している。モースは、圭介の「日本の植物に就いては一から十まで知っている」点を評価し、アメリカにおける日本の植物研究の第一人者エイサ・グレイを引き合いに出すほどであった。クラークもまた、モース同様、圭介について、日本の植物に関する第一人者という印象を抱いたのではないだろうか。その時、クラークが圭介に求めたのは、最新の植物学ではなく、ほかでもない日本の

植物に関する知識だったのである。

②シーボルトへの関心

クラークは、在京の間、横浜でシーボルトの日本の植物についての著述の一つ *Flora Japonica*『日本植物誌』が売り出されていることを広告で知り、一部購入するために横浜まで赴いた（資料1参照）。また、帰国の途で、シーボルト宅跡およびその庭を実見している（資料2参照）。長崎でクラークが妻に宛てた手紙（1877.5.2）には、「私はあすは有名なオランダの植物学者、シーボルトの旧宅とその庭を見にくつもりにしています。シーボルトは日本の植物を実に多く記述〔記載〕した人です」（太田 1979: 199）とあり、クラークがシーボルトに一目置いていたことが窺える。そのシーボルトに直接教えを受け、シーボルトの著作に名を残す圭介にも、当然のこと、敬意を払ったであろう。

クラークが訪れたのは、長崎近郊に開設された診療所兼学舎の鳴滝塾の跡と考えられる。鳴滝塾の裏手は丘に続いており、その一部は竹林をなし、また大小の立樹が密生していたとされる。シーボルト滞日時には、鳴滝塾周囲の空地や裏手の丘の上には、九州各地の植物はもとより、オランダから取り寄せた草花も植え付けられたとされる。シーボルトの植物園については財部（2003: 121）参照。

③植物研究の姿勢

尾張で探求された本草学は、江戸、京都、大阪とは一線を画して、「尾張」本草

学と称された。それは、文献学・解釈学ではなく、山野に出て実際の動植物、鉱物を探し観察する、さらには、本草会で互いに知識を交換するといった実証的研究が特徴であった。伊藤圭介も、当然のこと、野外調査、標本収集に重きを置き、幕末の藩所調所勤務の折にも、植物園に草木を栽培し、実物に基づいて植物研究をする必要を訴えていた。そのような圭介にとって、小石川植物園への出仕はまさに願ってもない機会であった。彼は同園にて、もっぱら植物の分類についての調査研究に邁進した（財部 2005）。

一方、クラークは、科学的農業の確立のために、植物生理学の実験的研究を進め、“The Circulation of Sap in Plants” “Observations on the Phenomena of Plant Life” の2編によって、この分野においてクラークの名声が高められたとされる（渡辺 1996（1976）: 303）。山本（1993: 15）が指摘するように、クラークは、自然、植物の徹底した観察に基づく学究的態度、すなわち「ペイコン的視点」を貫いた。しかし、ここで注意を喚起しておきたいのは、クラークが植物生理学の実験を進めつつ、一方で野外調査を重んじ、また、標本を重視した点である。

クラークは、マサチューセッツ農科大学学長就任後の講演（1868）の中で、隕石標本などの科学的収集物を重視し、その陳列室の必要性を説いた。これは、彼の科学研究の姿勢を端的に表している。

私は、書物のみによって判断を下す人物の意見には何の価値もおかない。

……われわれには書物も講義もある。そして学生たちは理論を雄弁に教えられている。しかし、彼らは具体的な事物のあるところまでおりてこなければならぬ。標本なしに自然科学を教えることは不可能なのである（渡辺 1996（1976）：312）。

圭介は、植物生理学をはじめとする植物学の最新の専門知識に通暁していたわけではなかったが、野外調査、標本収集を重視した。このような圭介の実物に基づく実証的な植物研究は、クラークにも通底する姿勢である。この点において、クラークは圭介に共感を抱いたのではないだろうか。

（2）伊藤圭介にとってのクラーク

東京大学設立の1年前に設立された札幌農学校は、わが国における高等農業教育機関の嚆矢である。その President の訪問を受け、植物をめぐって会談したこと、精養軒に招待され西洋料理をふるまわれたり本を恵贈されたりなどの歓待を受けたことは、圭介にとっても貴重な体験であり、大きな意味を持っただろう。

日本の農業の近代化を推し進めようと北海道へ向かうクラークらに、圭介は期待を寄せたに違いない。送別に花を贈るという行為からも、圭介のクラークらへの期待が窺える。一方で、クラークとの会談や押葉鑑定をとおして、圭介自身が、日本の近代化への自らの貢献を再認識したことだろう。

シーボルトをはじめとする外国人研究者と圭介との間には、植物研究を巡る交流が

見られたことは周知のとおりである。日本を近代国家として世界に知らしめたい明治政府は、圭介の外国人研究者との交流、彼らによる評価を対外的威信の確立ととらえ、それこそが、圭介の日本初の理学博士取得へと繋がる大きな要因となったとする考察もある（土井 2005：244）。そのような観点からは、W.S. クラークが圭介を高く評価したことは、政府による伊藤圭介の評価、ひいては理学博士取得へと繋がるものであり、圭介にとっても看過できない交流だったと結論付けられるだろう。

謝 辞

本稿は、圭介文書研究会の研究成果に負うところが大きい。名古屋市東山植物園には、伊藤圭介の写真を提供していただいた。とりわけ横山進氏には、多くの便宜を図っていただいた。北海道大学図書館北方資料室には、北方資料データベースからクラークの写真をダウンロードする許可をいただいた。また、東京大学大学院理学系研究科附属植物園には、小石川植物園の図の掲載の許可をいただいた。ここに感謝の意を表したい。

[参考文献]

- 土井康裕 2005『日本初の理学博士 伊藤圭介の研究』皓星社
- 蝦名賢造 1991『札幌農学校：日本近代精神の源流』新評論
- 藤田文子 1993『北海道を開拓したアメリカ人』新潮社（新潮選書）
- グレイ, エイサ 1997「植物標本の報告」（オフィス宮崎翻訳・構成）『ペリー艦隊日本遠征記』栄光教育文化研究所
- 原田一典 1975『お雇い外国人 13：開拓』鹿島出版会
- 開拓使 1976（1878）『札幌農学校頭米人クラーク氏原撰 札幌農学校年報』北海道大学図書刊行会
- 勝田政治 2002『内務省と明治国家形成』吉川弘文館
- 圭介文書研究会編 2005『伊藤圭介日記』第 11 集、名古屋市東山植物園
- 近藤哲生 1975「殖産興業と在来産業」『岩波講座日本歴史 14、近代 1』岩波書店：209-254
- マキ, ジョン・M（高久真一訳）1986（1978）『W.S. クラーク：その栄光と挫折』北海道大学図書刊行会
- モース, E.S.（石川欣一訳）1970『日本その日その日』1、平凡社（東洋文庫 171）
- 邑田仁 2004「我が国における研究植物園の足跡：第 1 回「小石川植物園」」『FFI ジャーナル』Vol.209、No.7：611-621
- 大場秀章編 1996『日本植物研究の歴史：小石川植物園 300 年の歩み』東京大学総合研究博物館
- 大蔵省 1885『開拓使事業報告』第一編（文献資料刊行会編 1986『明治前期官庁沿革誌集成 2』柏書房所収）
- 逢坂信忌 1995（1956）『クラーク先生詳伝』クラーク先生詳伝刊行会（伝記叢書 192 大空社 1995）
- 太田雄三 1979『クラークの一年：札幌農学校初代教頭の日本体験』昭和堂
- 『お雇い外国人 1-17』1968-76、鹿島出版会
- 佐藤昌彦ほか編・訳 1986『クラークの手紙：札幌農学校生徒との往復書簡』北海道出版企画センター
- 杉本勲 1960『伊藤圭介』吉川弘文館（人物叢書）
- 財部香枝 2003「伊藤圭介と植物園」名古屋市東山植物園『伊藤圭介の生涯とその業績』名古屋市東山植物園：120-123
- 財部香枝 2005「シーボルトを敬嘆させた尾張本草学：嘗百社の活動を中心に」中部大学国際人間学研究所『アリーナ 2005』：35-50
- 梅溪昇 1968『お雇い外国人 1：概説』鹿島出版会
- 渡辺正雄 1996（1976）『増訂お雇い米国人科学教師』北泉社
- 山本玉樹編著 1993『W.S. クラーク博士論文集』北海道大学理学部
- 吉川芳秋（木村陽二郎・遠藤正治編）1993『医学・洋学・本草学者の研究：吉川芳秋著作集』八坂書房

資料1 滞日中のクラークの活動1——来日から東京出立まで

西暦(年号)	月 日	活 動
1876(明治9)	3.3	ワシントンD.C.で吉田清成駐米公使と日本赴任に関する契約書を取り交わす。
	5.15	アマーフト発。アメリカ独立百年記念博覧会開催中のフィラデルフィアに立ち寄る。同所でホイラー、ペンハローと合流。吉田清成、西郷従道に会う。
	5.21	フィラデルフィア発。
	5.29	サンフランシスコ着。
	6.1	グレート・リパブリック号で日本に向けて出発。
	6.29	横浜着。 インターナショナルホテルで休息。午後、内藤誠太郎等の開拓使の役人の案内で東京に向かい、築地采女町の精養軒に投宿。
	6.30	黒田清隆開拓使長官と最初の公式会見。
	7.1	黒田長官が宿舎精養軒を訪ねる。 この日頃、森有礼や開拓使役人たちと食事。
	7.2	この頃、マサチューセッツ農学校留学中の上杉勝賢の家族に歓待される。
	7.3	黒田長官主催のクラーク一行歓迎晩餐会(上野精養軒)。
	7.4	アメリカの独立記念日祝賀パーティ出席。
	7.5	札幌農学校入学志願者9名(主に東京英語学校在学中の者)に対する口頭試問。この頃(7月上旬)、開拓使の官園、茶園等を視察。
	7.8	シーボルト『日本植物誌』購入のため横浜に行く。
	7.10	開成学校、東京書籍館見学。
	7.11	札幌農学校入学志願者6名の試験を行なう。内務省内藤新宿勧業寮出張所見学。
	7.12	自由な東京遊覧。浅草、相撲などを見る。
	7.13	11時頃、小石川植物園見学。伊藤圭介と初めて会う。
	7.14	工学寮見学。夕方5時頃、精養軒に伊藤圭介、山田を招待し、夕食を接待する。
	7.15	両国の川開きを見る。
	7.16	東京博物館見学。
	7.17-19	下総牧羊場および種蓄場視察。
	7.20	この頃、L・H・ギュリックから英語聖書30冊をもらう。
	7.21	天皇の還幸を見る。
	7.23	森有礼宅で食事。同席で内務卿大久保利通等に会う。上杉勝賢の養父の訪問を受ける。
	7.24	黒田長官主催のクラーク一行送別会(築地精養軒)。植物園から伊藤圭介・山田連名にてハシカンボク一盆、マツモトセンノウ一盆が精養軒に届く。
	7.25	玄武丸で黒田長官と共に北海道に向かう。

太田(1979:295-305)および『伊藤圭介日記』第11集を基に作成

資料2 滞日中のクラークの活動2——北海道出立から離日まで

西暦(年号)	月 日	活 動
1877(明治10)	4.25	船で函館出立、長崎へ向かう。
	5.1	この日頃、長崎着。見物する。西南戦争(2-9月)の戦傷者収容病院を見る。
	5.3	シーボルト宅跡見学。船で長崎を出立、神戸に向かう。関西に10日ほど滞在。この間、新島襄などに会い、同志社訪問。その後、船で横浜に向かう。
	5.17	築地采女町の精養軒に投宿。
	5.21	黒田長官から記念品と感謝状をもらう。黒田長官主催の送別会で左大臣岩倉具視、外務卿寺島宗則等と一緒にになったのもこの日か。
	5.24	シティ・オブ・ペキン号で横浜を立つ。
	6.9	サンフランシスコ着。
	6.11	この日頃、開拓使の依頼を受け、コロンビア川でのサケ漁について調査するため、陸路馬車でポートランドに向け出発。途中、寄り道をしシャスタ山頂をきわめる(6.16)。
	6.28	船でサンフランシスコ帰着。息子と再会。
	7.28	アマースト帰着。

太田(1979:295-305)を基に作成